

研究結果報告書

明治期日本で出版された朝鮮案内書に関する研究

所属： 延世大学校 国語国文学科
役職： 大学院生
氏名： 文 淳嬉

本研究は明治期の朝鮮案内書などの朝鮮を対象にしたトラベルライティングを対象に、日本人の朝鮮観の形成過程を分析することを目的にした。時間とともにどのように朝鮮観が形成され、変化したかを明らかにするため、『朝鮮案内』(明24)、『渡韓のしるべ』(明37)、『南韓旅行記京釜鉄道案内』(明38)『最新の韓半島附満州雑記』(明39)などの当時の出版書籍を中心に朝鮮がどのように記されたかを比較検討した。

それにより、次のような結果が見られた。

まず、朝鮮案内書の出版の初期にあたる明治20年代に出版されたものは、外交官、記者といった特定の任務を負って朝鮮へ派遣された人々によって書かれたものが大半で、朝鮮内地の基本的な情報提供に加え、個人の旅行中の経験談を記しているものの、内容の多くは既存の書籍に記載され情報を参考に、規定化された朝鮮蔑視の表現を強調したものが目立った。

初期の案内書に比べると、日露戦争前後の明治30年代以降の案内書は主に観光旅行や韓国移民を奨励するためのものが多く、内容においても朝鮮国内の基本的な地理、商業、生活といった情報と日本人租界地の紹介に重点をおいている。また記述方法に関しても初期にくらべ、朝鮮人に対する蔑視や卑下するような表現も和らいでいるように思われる。これは、初期の案内書が朝鮮を支配する名文を強調したが、明治30年代後半以降の案内書は朝鮮という国自体への関心よりも日本人の朝鮮での生活案内書のような役割をもったからである。例えば、‘汚い’という一つの形容詞の使い方と初期の記述とはまた異なり、意図的な目的をもった使い方ではなく経験による純粋な個人的な感想として記述している。

さらに『南韓旅行記京釜鉄道案内』といった案内書のように、明治30年代後半からの案内書や旅行記は鉄道が整備されると同時に決まったルートによる観光旅行が一般化され、冒険記というよりは旅行の思い出を綴った感想文という性格が強いため、朝鮮に対する個人的な感情を表現したものが少ない。しかし、いくつかの旅行記には初期の個人旅行記に比べ、朝鮮人と会話した内容や朝鮮人を直接尋ねて行くといったような経験談を記しており、個人の朝鮮観を見ることが出来るものもいくつかあった。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)